

鰍沢河岸跡出土の泥面子について

小 林 稔

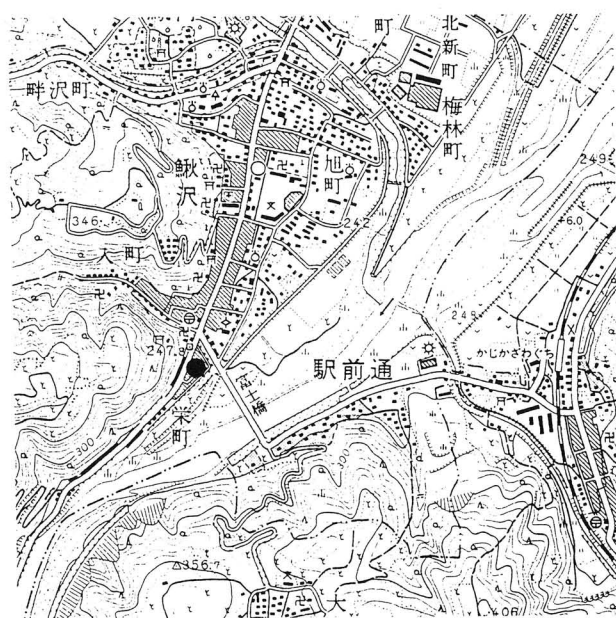
- | | |
|------------|---------------|
| 1 はじめに | 4 鰍沢河岸跡出土の泥面子 |
| 2 鰍沢河岸跡の概要 | 5 おわりに |
| 3 泥面子の分類 | |

1 はじめに

鰍沢河岸跡についての考古学的な発掘調査がはじめて行われたのは平成8年度で、富士川の堤防工事に先立って山梨県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われ、絵図や文献でのみその存在が知られていた河岸の中心施設である「御蔵台」に伴う荷積台跡やそれらを囲む柵の一部などの遺構が検出された¹⁾。今回の調査は平成12年度より鰍沢町明神白子地区の宅地等水防災事業及び一般国道52号のバイパス工事に伴って山梨県埋蔵文化財センターにより実施されているもので、調査主体が異なるため、県の事業となる区画整理に伴う調査区域をA区、国の事業となる堤防及び道路事業に伴う調査区域をB区として調査を実施しており、平成13年度現在も調査は継続中である。調査初年度の平成12年度は調査区の最も北側で河岸問屋街のあった部分を中心に発掘を行った。その結果、江戸時代末期から明治、大正にかけての陶磁器片や甲州金一分判、南鐐二朱銀を含め400点を越える銭貨などとともに、71点の「泥面子」と呼ばれる小さな土製品が出土した。泥面子については不明な部分も多く、未だ研究途上にあると言ってよい。そこで、今回鰍沢河岸跡で出土した泥面子に注目し、整理途上ではあるが、その分類や用途、流通経路などについて他の遺跡の事例と比較しながら若干の考察を試みてみたい。

2 鰍沢河岸跡の概要

鰍沢河岸は江戸時代のはじめに開かれた富士川舟運にかかわって、増穂町の青柳、市川大門町の黒沢とともに築かれた「甲州三河岸」のひとつである。鰍沢は地形的には釜無川と笛吹川が合流して富士川谷を形成する場所である。言い換えれば甲府盆地の水がすべて集まって富士川に注ぐ、まさに漏斗の口に例えられる場所であり、それゆえ古くから水害に悩まされつづけた地域である。しかし一方では駿州往還の要衝でもあり、江戸時代には舟運の発展に伴って南北40間、東西30間に及ぶ広大な「御蔵台」と呼ばれる広大な施設が築かれ、甲府代官所支配下の年貢米をはじめ諏訪藩、松本藩の年貢米あわせて年間約5万俵もの年貢米がここから江戸に送り出された。さらに鰍沢河岸は塩や海産物などの貴重な物資を甲州・信州へもたらす中継地点ともなり、規模・役割ともに三河岸で一番の発展を見せた。全盛時には多くの河岸問屋や旅館などが立ち



鰍沢河岸跡位置図（●が鰍沢河岸跡）

並び、城下甲府をも凌ぐ賑わいであったという。また、明治時代には年貢米の輸送は終了するものの、明治8年に設立された「富士川運輸会社」などによる旅客物資輸送の活性化により、江戸時代にも増して隆盛を誇り、鰍沢宿には60軒以上の問屋、250軒以上の小売店、10軒以上の旅館が立ち並んだとされる²⁾。しかし明治35(1902)年の中央線の甲府への開通は物流の流れを一変させ、大正11(1922)年には富士川運輸会社が輸送業務を停止するに至る。さらに昭和3(1928)年に富士身延鉄道(現在のJR身延線)の開通によって富士川舟運は終焉を迎えることとなる。

平成12年度の発掘では、何層にも及ぶ洪水砂と盛土の中から何度も修復をされた石垣や完全に埋没した石垣、建物の礎石が確認された。これはまさに洪水と闘いながら舟運とともに発展した鰍沢の往時の姿を明らかにするものであるといえる。

3 泥面子の分類

泥面子とは、粘土を型抜きした2cm～4cmの土製品で、江戸時代の中期、享保年間に登場した子供の玩具であるといわれている。享保12年の目付絵³⁾に「めんがた大坂下り」とあるように、上方にはじまりやがて全国に広まったものと考えられる。『嬉遊笑覧』に「今小児玩物のめんがたは面摸なり瓦の摸に土を入れてぬくなりまた芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが今はかはりて銭のやうにて紋形いろいろ付たる面打となれり」と記されている⁴⁾ように、円盤型の表面に文字や紋章を型抜きした面打(めんちょう)、人や鬼の顔をかたどった芥子面などその種類は非常に多彩である。金刺伸吾氏はこれらを形態によって以下のように分類している⁵⁾。

I 円盤形のもの

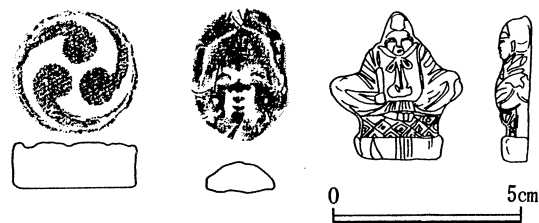
- A 大型 直径3cm以上のもの
- B 中型 直径2～2.7cmくらいのもの
- C 小型 直径1.8cm以下のもの

II 面を型抜きしたもの

- A 面形 人・動物・怪物面などを型抜きしたもの
- B 芥子面 面の中でも指先ほどの小型のもの

III 人・動物・野菜・魚類などを型抜きしたもの

IV 人形・道具・碁石・さいころ・泥玉など立体的なもの



第1図 面打(左)と面摸(中・右)
(いずれも新宿区内藤町遺跡)

加納梓氏は金刺氏分類のIを第I群、II～IVを併せて第II群として分類し、第I群を「面打」、第II群を「面摸(めんがた)」に相当するとしている⁶⁾。また、鵜沢久美子氏は金刺氏の分類に基いているが、「分類IVについては用途の上で若干の違いがあるのではないかと考えられる。」と述べている⁷⁾。鰍沢河岸跡出土の泥面子を分類するにあたって、本稿の中では比較検討の必要から全体を面打と面摸に大きく分ける加納氏の分類方法を基本とし、次のような分類を行った。

I 面打…円盤形のもの

- A 大型 直径3cm以上のもの
- B 中型 直径2cm以上～3cm未満のもの
- C 小型 直径2cm未満のもの

II 面摸

- A 面形 人、動物、鬼などの面の形をしたもの(金刺氏分類の芥子面もこれに含む)
- B 人、動物、野菜、魚、道具その他を模ったもの

ただし、Ⅱ－Bの中でも用途が違ふと思われるままごと道具や箱庭道具、碁石（弾碁玉）、泥玉などや、貼り合わせによる立体成型の人形については今回は面摸からは除いて考えることとした。

4 鰍沢河岸跡出土の泥面子

平成12年度発掘の鰍沢河岸跡A区からは71点の泥面子が出土している。内訳は面打（Ⅰ）はCの小型のみが1点、面摸はⅡ－Aが17点、Ⅱ－Bは人物が18点、動植物が21点、道具等が8点、不明なもの6点となっている。この出土状況を、東京都新宿区の遺跡と比較してみた。新宿区については江戸時代の遺跡調査が盛んであり泥面子の出土事例も多いことから比較対象に選択し、中でも10点以上の泥面子の出土が確認されている8つの遺跡を抽出し、各報告書の図版・遺物一覧表をもとに面打、面摸それぞれの数を確認し、鰍沢河岸跡との比較を行った。

まずはじめに出土した泥面子全点に占める面打・面摸それぞれの割合であるが、新宿区の8遺跡についてはすべて面打が80%以上を占めているのに対し、鰍沢河岸跡では逆に面摸が99%を占め、面打は小型のもの1点にとどまっている。面打と面摸の割合については同じ山梨県内の宮沢中村遺跡についても確認してみたところ、面摸が86%を占めており、新宿区の遺跡と県内の遺跡で完全に面打と面摸の割合が逆転している。ただし、宮沢中村遺跡は鰍沢河岸跡と比較的近い位置にあり、出土した泥面子のうちの何点かは同一の型からおこしたと思われるものもあることから、宮沢中村遺跡の泥面子が鰍沢河岸跡を経由して伝えられたものである可能性がある。また今のところ県内では江戸時代の遺跡の発掘事例があまりなく、泥面子の出土点数も少ないため、残念ながらこの割合の逆転現象がすぐに県内での泥面子出土の特徴を示すと断定することはできない。

次に面摸の形態についてだが、新宿区の8遺跡については面摸のほとんどが「面形・芥子面」（Ⅱ－A）に当たるのに対して、鰍沢河岸跡では人や動物を模ったもの（Ⅱ－B）が半数以上を占めている。また、そのうち人物像は18点あるが、その半分にあたる9点が黒天などの七福神を模したものであることも大きな特徴のひとつである。

新宿区の各遺跡と鰍沢河岸跡との間にこれほどはっきりとした特徴の相違が生じる理由はどこにあるのか。現在のところ次の2点が手がかりになると思われる。

（1）面打と面摸の用途の違い

泥面子は玩具としてとらえられてきた。たとえば「穴一」は、銭を投げて勝敗を競う賭博を子供たちが自分たちの遊びに取り入れて遊んだもので、『嬉遊笑覧』の「穴一」の項には「近頃は瓦にて作れる小き面がた又は紋尽しなどを用ゆ、めんてう紋打など云へり」とあり⁸⁾ 面打が銭の代わりに用いられたことが記されている。面打を使った遊びには他にも「きづ」や「六度」などさまざまなものがあり、後世のめんこやビー玉の遊び方に受け継がれているものもある⁹⁾。また面形や芥子面は唾で指の腹に付けてちょうど指人形のようにして使われたものである。しかし、人間や動物を模ったものなどはこうした玩具としての用途からは若干外れるのではないかと考えられる。特に七福神像などは玩具としてよりは信仰対象としてのほうが捉えやすく思われる。鰍沢河岸跡では、出土した石垣や礎石の周囲から、土地や家の繁栄、安全を願って埋納されたと思われる銭貨が400点以上出土している。泥面子もこうした埋納に関わって使用されたとは考えられないだろうか。例えば千葉県などでは畑の土の中から泥面子が出土する例が多くある。これは肥料として江戸から持ち込まれた堆肥に含まれていた江戸ごみに混じって入ってきたとする捉え方がある¹⁰⁾ 一方で、五穀豊穡を祈って畑に撒かれた物とする考え方もある¹¹⁾。面摸のなかには筍や大根といった農作物や米俵を模したものがあり、これらはこうした五穀豊穡の祈りとの関わりを連想させるものである。また、金刺氏はこうした観点について「めんがたは民俗関係では「面」について呼称されているものであり、面の中には魔力を調伏する呪術的な力を持つと信じられているものや幸福をもたらす神々また神々の使いと信じられている動物等がある」とし、神棚などに祀られていたものを子供がおもちゃとして持ち出して遊んだ可能性を挙げている¹²⁾。鰍沢河岸跡出土の面摸にある亀（3点）や宝船、唐獅子、打出の小槌などもこうしたいわゆる「縁起物」として祀られていたものと捉えることもでき

遺 跡 名	所 在 地	種 別	出土 総数	面 打				面摸	面摸の形の特徴
				小 20mm 以下	中 20 ～ 30mm	大 30mm 以上	総数	総数	
							%	%	
細工町遺跡（16）	東京都新宿区 細工町 5－1	町屋跡	18	1	15	2	18	0	
							100	0	
四谷三丁目遺跡（17）	東京都新宿区 四谷三丁目 10－4	町屋跡	33	0	26	6	32	1	邪鬼（面形）
							97	3	
南町遺跡（18）	東京都新宿区 南町 12・13	屋敷跡 （大縄地）	113	1	102	5	108	5	翁・鬼・お多福（面形） 大根・袋
							96	4	
早稲田南町遺跡（19）	東京都新宿区 早稲田南町 21	屋敷跡 （大縄地）	20	2	15	0	17	3	大黒（面形） 3
							85	15	
三栄町遺跡（20）	東京都新宿区 三栄町 22・23	屋敷跡 （大縄地）	351	13	222	66	301	50	大黒ほか七福神 8 点を含め面形 23 他に天神・花・俵・宝珠など
							86	14	
筑土八幡町遺跡（21）	東京都新宿区 筑土八幡町 39	屋敷跡 （旗本屋敷）	82	4	68	5	77	5	翁・烏天狗（面形） 天神・布袋・唐团扇
							94	6	
四谷一丁目遺跡（22）	東京都新宿区 四谷一丁目～ 本塩町地内	屋敷跡 （旗本屋敷）	35	2	28	5	35	0	
							100	0	
内藤町遺跡（23）	東京都新宿区 内 藤 町 （新宿御苑内）	屋敷跡 （大名屋敷）	223	3	176	26	205	18	恵比寿ほか面形 9 他に天神 2・組相撲・蛸など
							92	8	
宮沢中村遺跡（24）	山梨県中巨摩郡 甲西町宮沢 字東宮沢	村落跡	22	2	0	1	3	19	人面ほか面形 4 他に狸・花など ※鯉沢と同版あり
							14	86	
鯉沢河岸跡 A	山梨県南巨摩郡 鯉沢町白子明神 地内	河岸跡	71	1	0	0	1	70	恵比寿 1 ほか面形 17 他に七福神 9・亀・鳥・蟬・宝船など
							1	99	

泥 面 子 出 土 一 覧 表

る。さらに平成13年度調査区からは、男性の性器を模った面摸が出土しており、これなどはとくに子供の玩具としては考えにくく、やはり子孫繁栄を祈願したものとして考えるのが妥当ではないだろうか。これらの点から、玩具としての面打よりも面摸の出土が多く、そのデザインに七福神や亀などの「縁起物」が多いという出土状況は、まさに河岸問屋や旅館が立ち並び商業・流通の中心として発展した鰻沢の姿を映しているといえるのではないだろうか。この点については今後さらに各遺跡においてそれぞれの泥面子がどのような遺構から出土しているのかについて詳細に分析していくことでそれぞれの用途の違いが一層明らかにできるのではないかと考える。

(2) 流通経路の違い

先にも触れたように、泥面子の発祥は上方で、それが次第に形を変え、種類を増やしながら全国に広まっていったものとされている。特に江戸では幕末頃からこうした土製品が増え、今土焼など在地系の土製品の生産が増加している。実際今回比較対象とした新宿区の遺跡出土の泥面子はすべて江戸在地系のものとされている。さらに墨田区の江東橋二丁目遺跡では江戸末期の旗本屋敷から面打や面摸の型が多数出土しており、泥面子の生産工房があったこと、また出土量や出土範囲から面打がその主力製品であったことがわかっている¹³⁾。穴一は賭博として幕府がたびたび禁令を出すほど流行したことから、面打の需要が多かったであろうことも推測することができる。ところが一方で『近世風俗志（守貞謾稿）』の「穴市」の項には、「あないちはあなうちの訛なり。穴打を本とす。京坂の児童これを行ふ。今世は錢を用ひず、むくろじあるひはぜゝがいをもつてす。」とあり、ここでは面打の使用にはまったく触れられていない¹⁴⁾。つまり上方では泥面子の生産は面摸中心で、江戸のように面打が大量に生産されていなかった可能性も考えられるのである。その場合、泥面子が江戸から流入したものか上方から流入したものかによって、その構成に大きな違いが生じることになると考えられる。実際鰻沢には年貢米を運んだ帰り（上り）の舟によって県内には大変貴重な海産物や瀬戸内の塩¹⁵⁾がもたらされてお



写真1 鰻沢河岸跡出土泥面子(1) 面摸(面形・人物)



写真2 鯀沢河岸跡出土泥面子(2) 面摸(人物・動物)

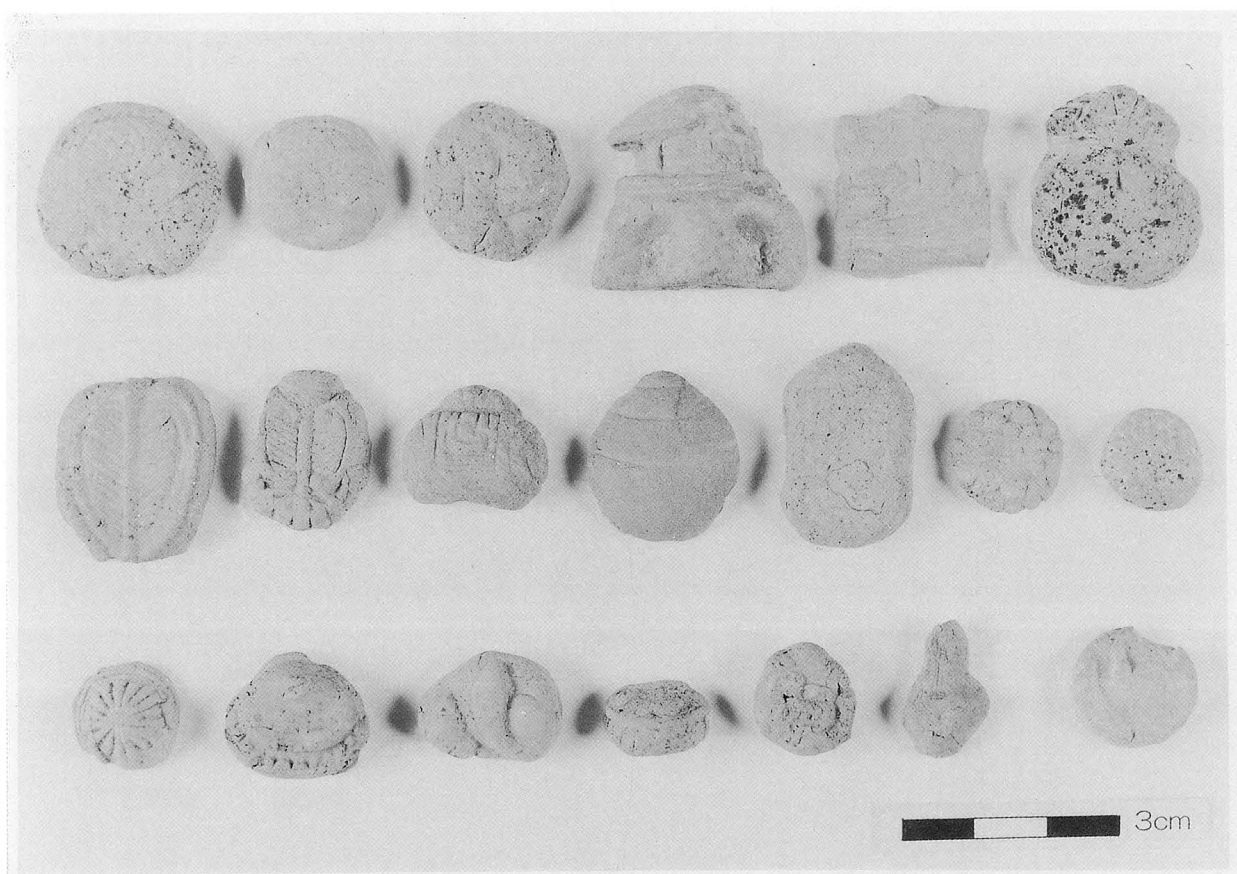


写真3 鯀沢河岸跡出土泥面子(3) 面摸(動物・道具・その他)・面打

り、泥面子が海産物や塩と共に上方から入ってきたのであれば、当然面摸の割合が多くなることが考えられる。残念ながらこれはまだ可能性の域を出ていないが、今後西日本地域の泥面子の出土状況を調べることに、鯀沢河岸跡出土の泥面子の胎土分析をすることで明らかにしていくことができると考えている。また、鯀沢河岸跡の出土遺物の中には丹波産や堺・明石産の播鉢、肥前系の陶磁器が数多く見られる。泥面子の流通経路の分析はこうした他の出土遺物の流通経路についても考察する材料になるものと考ええる。

5 おわりに

河岸跡の発掘事例は全国的にもその数は少ない。その理由としては、河岸自体がその地域の物流の中心地であるため、その後も発展を続けて現在に至っている場合が多く、そうした場合は時代と共に遺構自体が壊されたり作り変えられたりしている可能性が高いこと、また遺構が残っていたとしても大規模な都市の再開発がかからない限り発掘調査が行われないことが考えられる。また、川河岸の場合、河川に隣接するために、遺跡自体が河川区域の中であつたり、堤防にかかっているために発掘が困難な場合が多いことも理由の一つとして考えられる。そうした中で河岸の中心施設である御蔵台から関所、河岸問屋街に至るまで河岸全体の姿を調査することのできる鯀沢河岸跡は、県内だけににとどまらず全国的にも大変貴重な遺跡であるということができよう。

鯀沢河岸跡の発掘調査は現在も継続中であり、その出土遺物は未だほとんどが基礎的整理の段階にある。こうした時点での考察は時期尚早で不十分な点も多いと思われるが、本稿で考察してきたような観点から泥面子について分析していくことは、河岸における流通の実態を明らかにしていくことにもつながると思われる。そこでこれを出発点とし、先に述べたいいくつかの課題も含めて今後さらにより細かい分析を進めていきたい。そしてそれが貴重な河岸遺跡の全容解明へのひとつの手がかりになるものと考ええる。

最後に、本稿をまとめるにあたって多くの方々にご協力頂いたことに心から厚く御礼申し上げたい。

註

- 1) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第148集『鯀沢河岸跡』1998 山梨県教育委員会／建設省関東地方建設局甲府工事事務所
- 2) 鯀沢町教育委員会『鯀沢町史』上巻
- 3) 喜田川守貞著 宇佐美英機校訂『近世風俗志（守貞謄稿）』（四） 岩波文庫
- 4) 喜田村信節『嬉遊笑覧』1830
- 5) 金刺伸吾『どろめんこの話』1974 季刊「どろめん」3号
- 6) 加納梓『土製品』1988 「三栄町遺跡」 東京都新宿区教育委員会
- 7) 鶴沢久美子『資料集 泥めんこ』1983 市川歴史博物館
- 8) 註3に同じ
- 9) 泥面子を使った遊び方の詳細については紙面の都合上ここでは割愛するが、「きづ」「六度」とともに『近世風俗志（守貞謄稿）』によれば、地面に図形を書いてこれに銭を投げ入れて勝負をする賭博から子供の遊びに変わったものである。
- 10) 北原直善『今戸土人形論』1992 江戸遺跡研究会第5回大会「考古学と江戸文化」発表要旨
- 11) 註4に同じ
- 12) 註4に同じ
- 13) 仲光克顕『墨田区江東橋二丁目遺跡にみる江戸の土製品生産—製作技法の検討を中心に—』1998 「東京考古」16 東京考古談話会
- 14) 註3に同じ。なお「むくろじ」はむくろじの木の実で、皮を取り除いた黒い粒が羽根つきの羽などにも用いられる。「ぜぜ貝」は小さな巻貝で、江戸では「きしゃご」と呼ばれた。穴一で銭の代わりに用いられる

ことからぜぜ貝（錢貝）と呼ばれた。

- 15) 鰺沢町史に、『甲州御廻塩は「竹原塩」（安芸国加茂郡竹原産）「波止浜塩」（伊予波止浜産）の二種が最も古く、ついで「才田塩」「赤穂塩」（いずれも文政年間）であり、安政ごろには「紀州産塩」「坂出浜塩」も甲州に入ってきた』とある。なおこれらの塩は鰺沢の地で包装し直されて、産地名では呼ばずにすべて「鰺沢塩」の名で取り扱われた。
- 16) 『細工町遺跡』1992 新宿区厚生部遺跡調査会
- 17) 『四谷三丁目遺跡』1991 東京消防庁／新宿区四谷三丁目遺跡調査団
- 18) 『南町遺跡』1994 兵庫県／新宿区南町遺跡調査団
- 19) 『早稲田南町遺跡』1994 新宿区遺跡調査会
- 20) 『三栄町遺跡』1988 東京都新宿区教育委員会
- 21) 『筑土八幡町遺跡』1996 新宿区筑土八幡町遺跡調査団
- 22) 『四谷一丁目遺跡』1998 東京電力株式会社／日本電信電話株式会社／新宿区四谷一丁目遺跡調査団
- 23) 『内藤町遺跡』第Ⅱ分冊＜遺物編＞1992 東京都建設局／新宿区内藤町遺跡調査会
- 24) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第181集『宮沢中村遺跡』2000 山梨県教育委員会／建設省甲府工事事務所／日本道路公団東京第二建設局